

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



外国語学研究科委員長・COE事業推進担当者

大里 浩秋

神奈川大学がCOEの共同研究を開始してからすでに3年が過ぎて、私に書く番が回ってきた。そこで、この機会を利用して、個人的な経験も含めて今考えていることを記したいと思う。

4年前の春私は在外研究に出かけて1年間留守をしたので、その間の準備には預かっていない。それでもたまたま、COEとか非文字資料とかいう耳慣れぬ言葉が滞在先の上海に届くことがあり、しかし理解及ばずで、一体何をやろうとしているのだらうと思っていた。学部が違って普段顔を合わせたこともない人がかなりの数集まって共同研究をするという情報に、うまくやっていけるのかなとも感じた。

私のささやかな経験では、共同研究は言うは易しで、誠に厄介な代物である。無理矢理集めると戦力にならない人が出てくるし、積極的に参加した人でも自己主張が過ぎるとグループのまとまりを欠くことになり、テーマを煮詰めきれぬまま時間が過ぎて、いざ成果を発表する段には個人研究の寄せ集めになってしまうなどなど。

在外研究から戻ったときが我がCOEプログラムが始まるときと重なって、私もその末席に連なることになった。そしてこの間しきりに感じたことの1つは、やはりメンバーの共同研究に対する認識の不統一があるという点であった。自分の得意とする分野で調査し報告書を書けばそれですむというものではないのであり、他のメンバーの調査研究に耳を傾けお互いの考え方の違いについて根気よく意見をぶつけ合って、テーマに即した結論を導き出す必要があるが、「共同」することの苦勞に多くのメンバーが慣れていないのである。

もう一つ、COEプログラムは院生を含む若手研究者の育成をきわめて重視しているが、それは大事なことであると誰もが認めつつ、それでは一体どんな方法で育成するかには習熟していないという点である。他でもなく私自身が、これまでの研究でも今回のプログラムでも、院生の能力を引き出すべく大いに彼らを動員したとは言いがたい。

それゆえに、今思うのはリーダーを始めとする諸氏のこの間のご苦勞であるが、3年の月日は決して無駄ではなかったのであり、共同研究の不慣れさを徐々に克服しつつあると感じている。学部や専門の異なるメンバーの組み合わせが苦にならなくなり、各メンバーが分担して進めてきた研究成果を共通の場で発表し議論する機会が増えたことはその表れであろう。また、若手研究者の育成については、中国言語文化専攻の場合そもそも院生の数が少ないという問題を解決しなければならないので、事は簡単にはいかないが、残る2年のうちにCOEの掲げる目標に少しでも近づぐための努力をしなければと考えている。

4年目のスタートは、もはや切られているのである。